Greeting

動物園体験から広がるもの

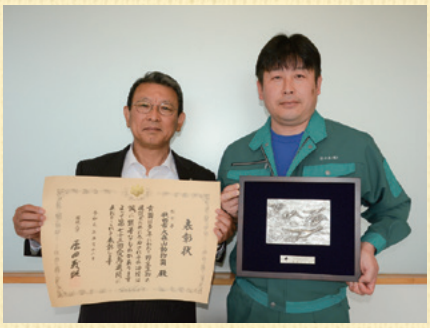
園長　小松 守

今年のサマースクール、飼育員さんからモルモットの生態を教わった子どもたちが、モルモットのより快適な生活空間づくりに挑戦した。動物と対話し、知ることで関心と愛着が深まり、動物を守ってあげたいという思いが飼育作業につながったのだろう。

動物園の大事な役目の一つは、動物園体験を通じて、動物と動物園理解の場を提供することだ。自然や野生動物保護などへの広がりは、その延長線にある。動物園には動物理解につなげる教育力と人を引きつける力が欠かせない。大森山動物園は近隣にある秋田公立美術大学との大森山アートプロジェクトやネーミングライツ・パートナーである秋田銀行様の支援による魅力づくりが進んでいる。

大森山動物園のテーマ「動物と語らう森」は、間近での動物園体験へと広がり、さらに、動物への関心と愛着の高まりに結びついているように思える。この5月、イヌワシなどの保全活動やその理解普及等が認められ、環境大臣から野生動物保護功労表彰をいただいた。動物と動物園教育への更なる期待の表れだろう。伝える努力に終わりはない。

モルモットの部屋作り
（8月2日サマースクールにて）



環境大臣賞受賞（5月12日授与）

アシカのマヤが「竿燈」を披露

飼育展示担当　千葉 可奈子

秋田の有名な夏祭り「竿燈まつり」は、提灯を下げた竹竿を稲穂に見立て、額や肩、腰などに乗せ、上手にバランスを取り、観客を魅了するお祭りです。

カリフォルニアアシカのマヤは、鼻先に物を乗せてバランスを取ることがとても上手で、鼻先にボールを乗せる様子を見ながら「これは竿燈まつりの額の演技に似ているな」と感じていました。

秋田のお祭りを秋田の動物園のアシカが演技する。「これは、とても面白いかもしれない！」と思い、2018年の春から練習を開始しました。まずは、竿燈を作るところから始め、園内の竹林からちょうど良い竹を切ってきて、高さ1.5mほどの竿燈を組みました。そして、いよいよ竿燈を上げる練習です。バランスをとって竿燈を静止させるのはマヤにとっても難しく、はじめは、1秒竿燈を上げるところからスタートしました。練習を繰り返して少しずつ上げられる時間が延びていき、ついに、夏祭りに合わせて竿燈を上げる事が出来ました。

今年は竿燈を新調して練習を再開。練習を重ね去年の感覚をとりもどしました。お囃子の音色に合わせて竿燈を上げる様子は本物の差し手のようで、大勢のお客様に動物園で竿燈を楽しんでいただきました。来年も練習を積んで、マヤの妙技をみなさんに披露したいと思います。

バランス保持が難しい竿燈

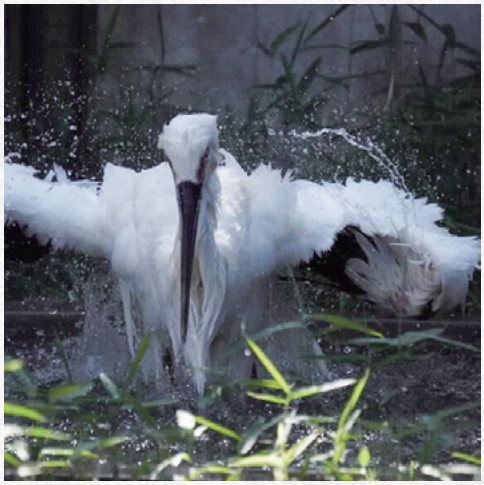
大森山 もりもり コンテスト

Instagramに「#大森山もりコン」のハッシュタグをつけて投稿していただいた作品の中から、大森山動物園スタッフの投票により6枚を選出しました。スタッフでもなかなか見かけない、写真に収めるのが難しい動物たちの表情や瞬間を捉えた素敵な作品をご覧ください！

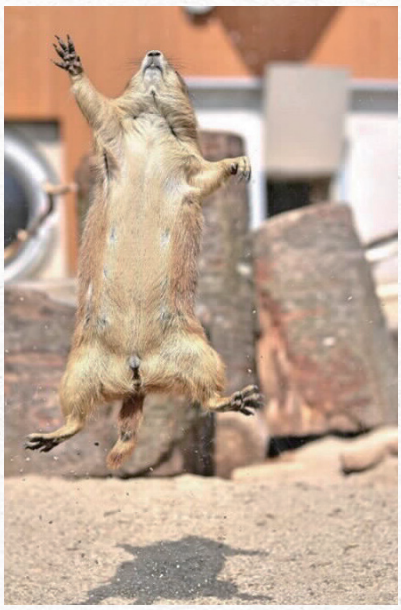
昨年来園したリリーが、だいすけと仲良く寄り添う姿に、ほっと安心します。

kurotibisanさん

スタッフでも写真を撮ることが難しいコウノトリの水浴びという瞬間をキレイに捉えていて、職員一同感動した1枚でした。



kurotibisanさん



iris_s1864さん

プレーリードッグがジャンプした一瞬を捉えた貴重な1枚です！

syoutan_12さん

普段はプニプニ、コロコロかわいらしい姿のプレーリードッグがイケメンに見えます。

marimolovesIさん

普段はクールでイケメンなリヒトが見せた、甘えた表情が印象的です。

日に日に成長する子どもたちですが、まだまだお母さんが大好きで、甘えん坊な表情が可愛らしいです。

nakacchi_desuさん

「大森山もりもりコンテスト」は2019年の通常開園期間中（2019年12月1日まで）は引き続き開催していますので、ぜひご参加下さい。
次号のコミュニケーションNo.99にも作品を掲載予定です。